

1 黒葉枯病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は被害植物で長く生存し、また種子に付いて種子伝染する。保菌種子では発芽障害や生育初期の立枯れを起こしやすい。
- 2 気温が20℃を越える頃から発生し、25℃前後で天候が短い周期で変わるような年に発生が多く、肥料切れも発病を助長する。肥培管理に留意し、発病初期に薬剤防除を行う。

B 耕種的防除法等

- 1 健全種子を用いる。
- 2 肥培管理に留意し、肥料切れの状態にならないようにする。

2 黒斑病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は被害植物及び種子に付いて伝染する。保菌種子は生育初期の立枯れを起こしやすい。生育が不良になると発病を助長する。
- 2 発病条件は黒葉枯病と同様であるが、本病は根も侵すため、栽培管理及び収穫作業の際に根を傷付けないように注意する。傷口からも感染し、発病するので、傷のあるものは貯蔵しない。

B 耕種的防除法等

- 1 健全種子を用いる。
- 2 肥培管理に留意し、肥料切れの状態にならないようにする。
- 3 管理作業や収穫時に根に傷を付けないようにする。

3 斑点病

A 生態と防除のねらい

- 1 本病原菌は種子や被害植物に付いて残り、伝染源となる。
- 2 7～9月頃の気温の高い時期に発生し、肥料切れ及び過乾燥条件で発生する。

B 耕種的防除法等

- 1 健全種子を用いる。
- 2 肥培管理に留意し、肥料切れの状態にならないようにする。

4 うどんこ病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は被害部に形成された子嚢殻で越冬し、これから生じた子嚢殻の胞子によって伝染する。
- 2 春まき栽培では5～6月、夏まき栽培では9～11月に発生が多い。多発後の防除は困難なので、薬剤防除は早めに行う。
- 3 過度の密植や多肥栽培は発病を助長するので、株間を適正にして、通風採光を良くする。



B 耕種的防除法等

- 1 密植を避ける。
- 2 適正な肥培管理を行う。

5 根腐病

A 生態と防除のねらい

- 1 「しみ」とも呼ばれ、梅雨期など降雨の多い時期に発生が多い。多湿土壌で発生が多いので、ほ場の排水を良くする。
- 2 病原菌はリゾクトニア属菌で被害植物とともに土中に残存して伝染するので、被害残さの除去に努め、発生ほ場では連作を避ける。

B 耕種的防除法等

- 1 連作を避ける。
- 2 ほ場の排水を良くする。
- 3 被害残さを除去する。

6 軟腐病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原細菌は土壌伝染し、多犯性でニンジンの他ハクサイ、ダイコン、レタス等多くの作物を侵す。温度が25～30℃で土壌が多湿の場合に発生が多いのでほ場の排水を良くし、多発ほ場ではイネ科、マメ科植物と輪作する。
- 2 害虫の食害は発病を助長するので、害虫の防除に努める。

B 耕種的防除法等

- 1 発生ほ場では、連作を避け、イネ科、マメ科等の作物と輪作する。
- 2 ほ場の排水を良くする。
- 3 被害残さを除去する。

7 白絹病

A 生態と防除のねらい

- 1 病原菌は菌核あるいは被害植物とともに菌糸で土壌に残り伝染源となる。非常に多犯性の病原菌で20種以上の植物を侵す。
- 2 発生は夏期高温時、地表面に有機物が豊富なほ場や排水不良ほ場で発生しやすい。
- 3 発病後の防除は困難なので、水稻との輪作や被害植物の処分を厳重にし、病原菌の密度を高めないようにする。

B 耕種的防除法等

- 1 発病の多いほ場では4～5年水稻を栽培する。
- 2 被害株は、発見次第周囲の土とともに取り除く。
- 3 酸性土壌で発生しやすいので、適正な土壌pHで栽培する。
- 4 有機物は完熟したものを施用する。

8 キアゲハ

A 生態と防除のねらい

- 1 年3回の発生で、幼虫は緑色で大型である。一般に5～9月頃に被害が見られ、幼虫が大きくなると暴食するため主軸を残して丸坊主になる。
- 2 大発生することはほとんどない。

9 ハスモンヨトウ

A 生態と防除のねらい

- 1 ハクサイ、キャベツ、レタス、エンドウ、バレイショ、サトイモ等多くの野菜を加害する。
- 2 夏まきニンジンで集中的に産卵することもあり、9～11月の発生は多くなりやすい。
- 3 夏季が高温乾燥に経過する年には、秋に大発生することがあるので、指標作物としてサトイモなどの被害状況や病害虫防除所のホームページ (<http://www.jppn.ne.jp/kumamoto/>) に掲載される情報（トラップデータ等）に留意して適期防除に努める。

B 耕種的防除法等

ほ場の周辺に遮断溝を作ったり、ビニルや塩ビ板で、ほ場周辺を囲い、幼虫の侵入を防ぐ。

10 ハモグリバエ類

A 生態と防除のねらい

- 1 セリ科で問題となるハモグリバエ類は、マメハモグリバエの可能性が高い。
- 2 マメハモグリバエの成虫は、体長が2mmほどのハエで、背面から見ると頭部以外の大部分が黒色、側面から見ると体全体が黄色に見える。
- 3 マメハモグリバエの幼虫は、体色が濃い黄色で、老齢幼虫の体長約3mmであり、葉に潜り葉肉を食害する。その後、葉の表皮を破って地上や葉上で蛹化し、2mm前後の俵状で褐色の蛹となる。

B 耕種的防除法等

ほ場周辺の雑草は、除去する。